

- 259
- 李正模 [1987] 西山休静の浄土思想と諸経—諸師の関係について—, 『印仏研』 37
- 趙明烈 [1998] 李朝時代仏教歌辞に現られた浄土信仰, 『印仏研』 46(2)
- 蔡沢洙 [1971] 韓国仏教の伝統的学習教育課程について, 『印仏研』 38
- 韓基斗 [1973] 韓国仏教の実学的傾向, 円光大学主催セミナー, 『アジア公論』 2-9
- 韓鍾万 [1993] 金時習の三教合一思想について, 『印仏研』 83
- 洪潤植 [1976] 『韓国仏教儀礼の研究』, 隆文館

キム チョンハク
(東京大学大学院博士課程)

大乘仏教起源に関する一考察

朴 点淑 (一黙)

- I 大乘仏教起源説の問題
- II 大乘仏教運動の成立年代
- III 大乘仏教成立の社会的背景
- IV まとめ

I 大乘仏教起源説の問題

1. 大衆部からの起源

大乘仏教がいつ成立したか、当時のインド社会で、どのように位置づけられたものであろうか。確実な記録がないので、正確には判定できないが、一般的に大乘仏教は紀元1世紀前後に起こった新しい仏教運動であるといわれる。

大乘仏教の起源に関する問題が、学問的に論じられるようになったのは、明治以降になってからである。江戸時代まで、一切経は釈尊一代の説法と信じられていた。しかし、その時代にも富永仲基(1715~1746)のように『出定後語』を著し、客観的な立場で「大乘非仏説」を唱えた者もいた。近代になると、西洋の原典を忠実に読み下してみたいこうとする仏教研究が紹介されるに及んで、大乘経典は仏陀の直説であるとする伝統説に揺らぎが生じた。その間にあって村上专精(1851~1929)が『仏教統一論』や『大乘仏説論批判』などを著して、大乘経典が仏陀の直説でないことを論証したのである。

この大乘非仏説論を批判し、大衆部起源説を唱えたのは前田慧雲

(1864-1930)である。彼は『大乘仏教史論』を著して、大乘仏教の教理の諸系統を歴史的に研究し、その起源を追求した。さらに『部執異論疏』に、大衆部が法華・涅槃などの諸大乘経を蔵していた¹と説いていることを根拠にして、大衆部こそ大乘の起源であると主張するに至った。これはその後の仏教学者の見解に大きな影響を与えた。

部派教団における進歩的傾向は、すでに大衆部Mahāsamghika系の諸派にみられるが、彼らは人間の理想を阿羅漢におかないで仏陀の位に達することを目標とした。そして、「諸仏世尊はみな出世なり、一切の如来には有漏法はない。その語は皆転法輪である。如来の色身、威力、寿量に辺際はない。一刹那の心に一切法を了する²」とした。また菩提bodhiを求める菩薩bodhisattvaは人々を救済するために願って悪趣に生まれるといい³、また業生にたいして願生という新しい思想を発展させた⁴。

存在論については、上座部系の説一切有部Sarvāstivādinが生・住・異・滅の四相によって変化しない存在を三種（三無為一虚空、択滅、非択滅）立てるのに対して、大衆部は九種（九無為）を主張した。三無為のほか、空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処（四無識定、すなわち禪定の階梯）、縁起支性（十二縁起）、聖道支性（八正道）をいう⁵。

さらに時間論についても、有部が法の実体は過去・現在・未来に実在するものでなければならないとして、三世実有・法体恒有と主張したのに対して、大衆部は現在だけが実有で、過去・未来は無体であるとする⁶。

この他、大衆部は「有情の心性は本浄なるも客塵の随煩惱に雑染せられて偶然に不浄になっている⁷」という心性本浄説を発展せしめた。

このような大乘仏教大衆部起源説は、西洋の学者においても見られる。たとえば、N. Duttは、大乘は南方大衆部系統の部派から発生し、有部から

¹ 前田[1903]57,63.

² 『異部宗輪論』(大正蔵49,15b-c).

³ 『異部宗輪論』(大正蔵49,15c).

⁴ 『部執異論』(大正蔵49,20c).

⁵ 塚本[1981]234-235. 金倉[1981]87.

⁶ 塚本[1981]235. 金倉[1981]87.

⁷ 『異部宗輪論』(大正蔵49,15c).

の影響を認めており⁸、E. Conzeも大乘に大衆部から影響された思想の4項目を挙げている⁹。Th. Stcherbatskyは、涅槃時に残存する生命的な人格について、大衆部や犢子部に見られ、それが経量部に継承され、大乘仏教へ推移していくと、述べている¹⁰。

また水野弘元博士も、「大乘思想の成立に関しては、部派の思想や教理を紹介している『異部宗輪論』、『パーリ論事』、『大毘婆沙論』などによって、大乘思想は、部派の中で進歩思想を有していた大衆部系から発達したものであるが、この大乘思想がインド各地に拡大するようになると、必ずしも大衆部系の人々だけでなく、保守的な上座部系の人々の間にも共鳴者が現れ、大乘は特定の部派のみに独占されるというのではなかった。」と主張している¹¹。

以上のように部派仏教の中で、大衆部は進歩的であり、大乘への架橋的なるものであったと、古くからいわれている。なお他部派の法蔵部、経量部からの影響も考慮しなければならない。

2. 在家菩薩の台頭

従来、大衆部の教義が大乘のそれと類似していることから、大衆部が起源となって、その中から大乘仏教が発生してきたと考えるのが通説であった。

このような状況の中で平川彰博士が発表した『初期大乘仏教の研究』(1968)は、それまでの方法を一新するものであった。大乘教団は、部派とはまったく異なる仏塔信仰を中心とする在家集団から始まり、それが大乘と名乗るに至るというのである。その根拠になる4つの点を、佐々木閑先生のまとめに依拠して引用すれば¹²、

① 大乘の菩薩は波羅提木叉ではなく十善戒を戒として用いる¹³。

⁸ N.Dutt[1930]26-31.

⁹ E.Conze[1962]195-198.

¹⁰ 金岡[1957]155.

¹¹ 水野[1954]313.

¹² 佐々木[1995]3.

¹³ 平川[1990]3-78.

② 多くの大乘經典が比丘を非難している¹⁴。

③ 仏塔は仏の所有物であって僧団には属さない領域であるが、大乘教徒はその仏塔で生活していた¹⁵。

④ 異なる教義を主張する者が同一僧団の中で共住することは不可能であるから、部派教団の中から大乘が発生したと考えることはできない¹⁶。

十善は原始仏教においては戒としては扱われていなかった。初期大乘經典を代表する『般若経¹⁷』を見ると、そこに新たに菩薩の戒として取り入れている。そして少し後になると部派系統の二百五十戒が導入されたことが知られている¹⁸。また中国人求道僧の義浄(635-713)がもたらした『根本説一切有部毘奈耶』は大乘仏教徒の所有していた律であったと記録されているといわれる¹⁹。

仏塔崇拜は釈尊滅後からはじまっている。仏舎利を八部に分け、仏舎利塔を建立したともいう²⁰。在家信者を中心に信仰されたが、時代が経つにつれて、仏塔崇拜に比丘・比丘尼たちも加わり、功德の増長を願ったことは、BhārhutやSānchiに残る仏塔の寄進名からも知ることができる²¹。さらにパーリ律を除き律蔵のほとんどが、すなわち『四分律²²』『五分律²³』『摩訶僧祇律²⁴』『十誦律²⁵』『根本説一切有部毘奈耶²⁶』などには、造塔法や塔の供養法を盛り込んでいることが知られている。

佐々木閑先生は、アショーカAsoka王の時代に律蔵における破僧の定義

¹⁴ 平川[1990]22,23,44,35,63,124,128,137,229,349,484。

¹⁵ 平川[1990]189-316。

¹⁶ 平川[1990]332-356。

¹⁷ 『大品般若経』巻5(大正蔵8,250a)。

¹⁸ 『大智度論』巻13(大正蔵25,160c)。

¹⁹ 高崎[1985]12-15。

²⁰ DN.16 Mahāparinibbāna-suttanta, vol. II, p. 167. 『南伝』7巻、126。

²¹ 杉本[1984]319-393。塚本[1996]556-599/711-914。

²² 『四分律』巻52(大正蔵22,958ab,957c)。

²³ 『五分律』巻26(大正蔵22,172c-173a,176a)。

²⁴ 『摩訶僧祇律』巻33(大正蔵22,497c-498a)。

²⁵ 『十誦律』巻56(大正蔵23,415bc)。

²⁶ 『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻18(大正蔵24,291c)。

が変更され、同一の僧団の中で異なる教義を持つ者が共住していても、布薩などの集団行事さえ一緒に行っていれば、何の罪にも問われないことを示している²⁷。

ともあれ、その後、平川彰博士の研究方法に従った研究が続き、学会の定説として多くの支持者を獲得し、20年以上の年月が流れたのである。

しかし、もちろん、多方面からの研究が平川説に反論を提示している。早くに高田修博士は考古・美術の遺跡において、部派仏教の資料が見られるに反して、初期の大乘仏教を示唆する積極的な証拠が見当たらないので、大乘は地下潜行的な宗教運動ではないかといって、仏塔起源説に基本的な疑問を呈した²⁸。さらに杉本卓洲²⁹、肥塚隆³⁰先生らも考古学の立場で平川説に疑問を提示している。最近、佐々木閑先生は平川彰博士の『初期大乘仏教の研究 I・II』を綿密に検討考察してから、大乘仏教は部派の一部の比丘とそれを支援する在家菩薩によって展開したと考えても矛盾がないことを明かしている³¹。また下田正弘博士も碑文資料を提示しながら、その大乘が、けっして部派と思想的にも教団的にも断絶したものではなく、徐々に質を異にし始めたものである³²と主張している。

G. Shopenも、文献資料より古い碑文に、出家者の積極的な参加が見られ、それを通して大乘仏教が僧侶の中心的な運動であることがわかると、いう³³。

このように最近の研究では、在家仏塔教団の存在に否定的な意見も数多く提出されはじめ、大乘仏教を部派仏教内部で興起した新たな仏教運動と捉え直そうという考え方が顕著に見られる。

3. 初期大乘「教団」の存在の問題

²⁷ 佐々木[1995]29-62。

²⁸ 高田[1969]265-282。

²⁹ 杉本[1984]41。

³⁰ 肥塚[1985]263-285。

³¹ 佐々木[1995]57。

³² 下田[1997]51。

³³ G. Shopen[1997]。

現在、膨大な大乘經典ならびに論が伝えられているのは周知のことであるが、初期大乘教団の存在を明らかにする手がかりがあまり見当たらない。たとえば、大乘仏教の発生期（紀元前後）のインドには、現在数千に及ぶ碑文の寄進銘文が知られている。ほとんどが仏塔に対する寄進であり、その中で部派教団の名前は現れているが、大乘教団への寄進を銘記した事例はあまりない。

塚本啓祥博士が集めた資料をもとにして、時代が最も古いBhārhut, Sāñcīそして少し下のMathurāの碑文の状況を調べてみれば、次のようである³⁴。

地域	碑銘総数	寄進者名数	出家者の寄進数	年代
Bhārhut	176	119	39	B. C. 2-1
Sāñcī	760	676	229	B. C. 2-1
Mathurā	105	70	36	A.D. 78 -350

このように、出家者による寄進が、Bhārhutでは33%、Sāñcīでは34%に及び、その中身は、大半が仏塔である。Mathurāでは50%を上回り、仏像に対する寄進が多く見られる。さらに教理専門家ともいえる、bhāṇaka説法者、sutaṃtika経の精通者、peṭakin三蔵の精通者、pacanekāyika五部の精通者、caturvidya四阿含の精通者、prāhanikas精勤者、dharmakathika説法師、treṭṭika三蔵受持者などの名前が現れる。これは一般の比丘のみならず教団の専門化された教法伝持者も仏塔崇拝に関わった可能性を示す。

なお、大乘仏教と密接に関係があるといわれる、南インドのNagārjunakoṇḍaや北西インドにおいて大乘Mahāyānaと名乗るものが見られない。さらに3-4世紀のNagārjunakoṇḍaで発掘された伽藍遺跡から見れば、ほとんど仏塔（後に仏像）を祈る塔院（caitya）と僧院が結びつけられてお

り³⁵、少なくとも4つの部派の名が知られ、そのうち西山部Aparaśailiyaに対する寄付が多いので、勢力があったと思われる。

また北西インドでは、当初から伽藍が塔院と僧院によって構成されており³⁶、6つの部派の名が知られ、そのうち説一切有部に所領された例が多く見られる。

インド文化圏といわれる全地域の仏教碑文にて、大乘Mahāyānaと名乗るものを確認すると、A. D. 6世紀から12世紀にかけて東インド11例、中インド5例、西インド2例ずつ現れ、総18例が見られる³⁷。

G. Shopenによれば³⁸、いま大乘と呼ぶものは、少なくとも4世紀までは独立した教団として形成してなかった。そのところをE. Lamotteが大乘について、「それは決して新しい部派を形成したのではなく、同じ部派の教団内において発達したものである」と言ったことは、部分的には正しい、と述べている。

また、5世紀頃の法頭の『高僧法顕伝³⁹』によると、その時代のインドには、小乗を学ぶ寺、大乘を学ぶ寺、大小兼学の寺があったことを伝えている。Mathurāでは部派仏教系の人には舍利弗塔、阿難塔、目連塔を供養し、「摩訶衍の人は般若波羅蜜、文殊師利、光世音（観世音）を供養する」と述べており、Saṃkāśyaの項で「…塔…に僧尼はほぼ千人おり、みな食事をともし、大小学を雑え学んでいる」という。

7世紀の玄奘の『大唐西域記⁴⁰』においても、「大乘を学ぶ寺」24、「小乗を学ぶ寺」60、そして「大小兼学の寺」15を数えるという。そして部派名として、有部、正量部、上座部、大衆部、大乘上座部をあげている。もし大乘を学ぶ者が大乘の出家者であり、小乗を学ぶのは小乗の比丘であるとするならば、大小兼学ということは大・小乗出家者の共住をも意味する可能性を示している。なお7世紀の義浄も、大乘・小乗の区別をあまり厳

³⁴ 高田[1969]84.

³⁵ 高田[1969]80-82.宮治[1981]73.

³⁶ 塚本[1996].

³⁷ G.Schopen[1979].

³⁸ 『高僧法顕伝』（大正蔵51,859ab）.長沢[1978]63.

³⁹ 『大唐西域記』巻1-12（大正蔵51,870a,943c）.平川[1990]362-375.

³⁴ 塚本[1996]548-895.

しく見ず、「菩薩を礼し、大乘経を読む者」を大乘であると⁴¹いう。

では大乘の出家者の集団生活を規定する戒律についても、S. Duttは「大乘仏教は僧院生活を規定する意味においての律はなく、大乘と小乗の比丘たちは一緒に住み、また部派においても各部派の間は排他的ではなく、基本的に二百五十戒が守られていたのではないかと述べている⁴²。

このように、すでにB. C. 2世紀の考古学的資料からして、仏塔や仏像に出家者が深く関与しており、専門の仏教知識をもつものたちの関与も考えられる。さらに僧院と塔院とから成る伽藍形成が普遍化されて、大乘と名乗る碑文が、6世紀以後になってから現れてくるので、初期大乘教団の存在についての疑問を提起するものといえよう。

II 大乘仏教運動の成立年代

Maurya王朝（約B. C. 320-180頃）期の仏教は、インド全地域に広がり、南はスリランカ地方にまで伝わった。その後、中央アジアに伝播し、紀元1世紀には中国まで達した。

この間、経済的に安定した状況の中で、仏教聖典も何回かの結集によって確立し、律蔵も整備された。しかし教義解釈の相違による部派の分裂が起こるようになる。保守派の上座部と進歩派の大衆部に分かれ、さらに、それぞれが各地域ごとに多くの部派に分裂した。各部派はそれぞれに律蔵をもち、また独自の教理解釈すなわちAbhidharma（阿毘達磨・論）を確立した。そのうち、北インドでは有部や法蔵部・化地部および大衆部系の説出世部など、西インドでは犢子部や正量部など、南インドでは制多山部など大衆部系の諸派が優勢であった⁴³。

しかし、学問研究の進展につれて実践が形式化し、大衆性を失ってゆくことになったのである。加えて、B. C. 2世紀以降よりHindū教の世界にbhakti

⁴¹ 『南海寄帰内法伝』巻1(大正蔵54、205c)。

⁴² S. Dutt[1962]176。

⁴³ 早島[1982]72-74.塚本[1996]。

思想が明らかになってゆき、また北西インドではB. C. ... 2世紀以降よりさまざまな西アジア宗教思想が導入され、仏教徒の間にも鮮烈な刺激と影響を与えはじめていた⁴⁴。

こうした状況の下に仏教徒の中でも、紀元1世紀頃から新しい仏教改革運動が起こりつつあったと考えられる。この運動は仏陀を信仰の中心にすえ、その慈悲の力で自分たちも理想の世界に入れると考え、万人の救済を打ち立てようとしたのである。これがいわゆる大乘仏教Mahāyānaと呼ばれるものである。「mahā」は「大きい」、「yāna」は「乗りもの」を意味するが、「教え」という解釈もある。これに対して、これまでの部派仏教はHinayānaと呼ばれたけれども、「hina」とは「卑小」の意味であり、これは大乘仏教側から呼んだ貶称である⁴⁵。

大乘思想の萌芽は、部派の思想の中に芽生えはじめ、仏伝・Jātaka（本生譚）Avadāna（比喻物語）、ならびにアビダルマ仏教の宇宙論などの発達にともなって、少しずつ発展した⁴⁶。

こうして大乘仏教の運動は次第に高まりを見せ、とくに一般民衆の救済、すなわち利他行を強調するようになっていた。そしてその実践者を菩薩と呼ぶようになった。菩薩は本来、釈尊の前生を指す言葉だった。しかし大乘仏教においては、利他の誓願を起して、悟り（菩提）を求めて修行する人を在家であれ、出家であれ、すべて菩薩と呼ぶようになった。

実践の強調は禅定体験で得られる智慧prajñāが重視され、その内容は「空」として表現された。この空は説一切有部の「法体恒有」思想に対して、いかなるものも無常であり、無自性であることを強調し、無執着の実践を意味する。

空の実践は、具体的に六波羅蜜に示されている。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若の六度の完成を目指すものである。般若波羅蜜が他の実践の底辺にある。この般若波羅蜜の実践は特に一連の『般若経』系統の経典

⁴⁴ 塚本[1981]228-231.奈良[1979]351。

⁴⁵ 三枝[1975]116.早島[1982]71-74.中村[1968]117。

⁴⁶ 山口・横超・舟橋[1961]355-361。

群において強調された⁴⁷。

大乘仏教に顕著な別の特徴として、利他の誓願は菩薩たることに必修のものであり、これはその誓願によって仏からの授記を得るという思想に連なっている。その誓願を成就した仏（例えば阿弥陀仏）に帰依すれば、その誓願の故に救われるという思想も生じた⁴⁸。

一方、大乘仏教において仏陀観が拡大され、十方世界に多くの仏が同時に存在すると考えられた。これに関連して諸仏の性格がさまざまに説かれ、いわゆる「三身仏」が主張されるようになった。こうして、ヒンドゥー教と相似た有神論的（人格神崇拝の）仏教ができあがった。これは部派仏教と異なる大乘仏教の特色である⁴⁹。

こうした大乘の流れは、長い間、さまざまな思想がまじり合って、次第に大乘仏教に結晶して行くのである。一方、部派仏教の間で忘れられていた釈尊の根本精神・基本的立場に立ち返ろうとするものも少なくない。

そしてそのような思想が組織的にまとめられて、いわゆる大乘経典が生み出されるに至った。それらは諸仏を念想したりする冥想（三昧）の中でひらめいた思想のほとぼしりである。ここに経典の受持・読誦・解説・書写をすすめる風潮が生じた。新しい方法としての大乗経典とその崇拝が大乘仏教の特色となってどんどん広まって行った。

しかし、大乘経典の成立年代や地域についても特定することはなかなか困難である。一般に、A.D.200年前後の人と見られるNāgārjuna（龍樹150-250頃）の著作を基準として、そこに引用されている大乘経典の種類や内容を思想的に考察し、一方中国初期の訳経史に関する研究などを参照することになる。

最初の大乗経典は原始形態の般若経であろうと考えられている。「マハヤーナ」（摩訶衍）という言葉が初めて出てくるのは、A.D.1世紀ごろの『道行般若経』である⁵⁰。般若経自ら、南に起こり、西に流れ、北に移った

⁴⁷ 中村[1968]121-122。

⁴⁸ 平川[1981]47-50.中村[1968]119。

⁴⁹ 武内[1981]161-170。

⁵⁰ 『道行般若経』巻1(大正蔵8,427c-428a)。

ことを述べている⁵¹。

初期大乘経典の成立に関して、平川彰博士は、「中国に訳出せられた大乘経典の翻訳年代から推定しうる。最初の般若経典であるといわれる『道行般若経』が支婁迦讖によって中国に伝えられたのは、A.D.170年ごろであるから、150年ごろには、この経はすでに大月氏国に存在していたわけである。ゆえにそれより遡って、最古の「道行品」等の成立は、A.D.1世紀に遡ることは確かであり、あるいはそれより古く、B.C.1世紀頃に比定することも不可能ではない。したがって般若経の原型成立をB.C.1世紀、その成立場所を南インドと予想し、般若経の確立は北インドでA.D.1世紀と見ることができると言われる。宇井伯寿先生も少なくともB.C.1世紀、南インドにおいてと見る⁵²。

また次に、奈良康明博士は、「A.D.1世紀頃に般若思想がおそらく南インドのアーンドラ地方で成立したことがほぼ疑いなく、『法華経』の成立は明らかに北西インドである。また『華嚴経』もおそらく北西インド成立ではないかという。阿弥陀仏信仰や救済の思想が西アジアの宗教思想と関係が深く、その成立が北西インドではないかという。大乘仏教の成立にマトゥラーから北西インドにかけての地域が深く関わっていたことは否定できない⁵³」との見解である。

確かな証拠は見出し得ないにしても、多くの学者の見るところは、大乘仏教はおおよそ、A.D.1世紀初頭ごろより、複数の地方、特にアーンドラ地方や、ガンジス中流域から北西インドで生じた宗教運動であり、次第に相互に影響しあいつつ、発展してきたものであろう。

III 大乘仏教成立の社会的背景

⁵¹ 『道行般若経』巻4(大正蔵8,446b).『小品般若経』巻4(大正蔵8,555a).『小品般若経』巻13(大正蔵8,317b)。

⁵² 平川[1981]8以下。

⁵³ 宇井[1932]156。

⁵⁴ 奈良[1979]330-351。

大乘仏教が興起したのは、マウリヤ王朝の崩壊（B. C. 180年頃）からグプタ（Gupta）王朝の成立（A. D. 320年頃）に至る時期においてのことであったと考えられている。紀元前は、北西境から異民族が相次いで侵入した時代であり、紀元後は、クシャーナ（Kuşāna, 月支）が侵入して北方インドにわたってその帝国を建設した時期である⁵⁵。

まず、紀元前は、国家体制が北西インドと東部インドと南部インドとではいちじるしく異なっているが、統一国家であるマウリヤ王朝の崩壊とともに、インドの諸地方で徐々に小国家が成立するに至った。必然的に大規模な灌漑設備の荒廃をもたらし、自給自足の経済を目的とした閉鎖性の高い農村社会が形成され、龍神Naga信仰が広げられたのではないかと思われる。その跡が碑文に見られる⁵⁶。

当時、諸碑文のうちにはカースト制度に言及しているものは何も見当たらないので、マウリヤ王朝時代と同様に公には承認されていなかったのではなかろうか、といわれる⁵⁷。

マウリヤ王朝を滅ぼして興ったシュンガ王朝（Śuṅga, 紀元前187-30）はガンジス河流域を支配していたのみにとどまるが、北西インドには、ギリシア人の諸王が相次いで侵入して、いくつかの王朝を成立させた。彼らは、ギリシア的な体制が相当に取り入れられている。相續いて、Śaka人、Parthian人が侵入して、政治的支配を行っていた。他方、東南インドにも多数の小国が散在していたが、それらは純インド人の国王に統治されていた⁵⁸。

シュンガ王朝はバラモン教を信奉したというが、この王家には仏教に帰依した王と王妃があって、パールフト仏塔に寄進したことが碑文に見られる⁵⁹。

パールフトは中インドに位置し、おそらくアショーカ王の時代から前2世紀にかけてのもので、この仏塔には仏陀の姿がない仏伝図やジャータカ

⁵⁵ 中村[1956]97.平川[1974],287.

⁵⁶ 塚本[1996]Bhārhut 50/67/68/132.

⁵⁷ 中村[1968]298-299.

⁵⁸ 宮本[1954]336.

⁵⁹ 塚本[1996]1549.

物語が浮き彫りにされている。

なお仏塔群の中で最も完全に残っているのはSāncīである。中核部分はアショーカ王の時代に建てられたらしいが、シュンガ期、シャータヴァーハナ（Śatavāhana）朝治下にかけて拡大された。塔門のあいだに多数の仏伝図やジャッタカ彫刻がほどこされており、塔門や欄楯には寄進者の名が銘刻されている。それらは、比丘・比丘尼、在俗信者である⁶⁰。

紀元後においては、クシャーナ族が侵入したが、Kaniṣka(128-151ころ在位)王は北インドの大部分、西インドの北半分、中央アジア、アフガニスタンを含む地域を支配した。このクシャーナ族の生活様式は中央アジア的なものを多く保持しているとともに、ヘレニズム的な要素を伝え、インドに土着するにつれてインド古来の習慣習俗に同化して行った。

カニシカ王は有部の長老Pārśva脇尊者に帰依して、熱心な仏教外護者になった。また『Buddhacarita』（仏所行讃）を著したAśvaghōṣa馬鳴との交際があった。王は国内各地に仏塔伽藍を建立し、僧伽に供養を行った。この時代にバルティアやソグディアナ地方にまで仏教が普及し、やがてそれらの地方の学僧が中国に來朝して、仏典の翻訳に従事することになった。

このころガンダーラ地方からマトゥラー地方にかけての地域には、特に有部が中心となって仏教のアビダルマ的發展を一層推進せしめた。その結果、有部学説の一大集成である『大毘婆沙論』がカシミール学僧たちの手によって編纂された⁶¹。

一方、ガンダーラとマトゥラーにはその地方独特の仏教美術が發展した。ガンダーラ地方ではクシャーナ時代の初めころ（1世紀から2世紀初頭）に、仏像がはじめて造り出された。この仏像はヘレニズム美術の影響を強く受けたものであった。これに対して、ほぼ同じ時代、2世紀の初めに造られたマトゥラー仏像は純インド的な表現と作風とを示しているものであった。そして仏像は急速に一般化し、仏塔の代わりに礼拝対象となることとなった⁶²。

⁶⁰ 宮治[1981]38-51.

⁶¹ 奈良[1979]256-259.

⁶² 高田[1967].

さて、南方インドではシャータヴァーハナ王朝が勢力を得、純粋にインド的な帝国を建設した。この王朝がB. C. 200-A. D. 3世紀頃までデッカンを支配した。この王朝が四百年以上栄えたために、南インドは政治的に安定し、文化が興隆した。

シャータヴァーハナやシュンガ王朝はバラモン教を保護し、復興を促した。バラモンの使用する言語であるSanskrit語が、文化語としてはもとより、公用語としてもMagadha語にとって代わった。また、地方の部族信仰や俗信がヴェーダの教義体系のもとに組込まれて、バラモン教と土着民の信仰が結合した。これをヒンドゥー教ともいう。こうして、インド社会にバラモンを頂点とするカースト制度が確立されるに至った⁶⁴。

バクティ（信愛）信仰は、インドの西部で、仏教以前に起源を持ち、唯一神をbhagavatと呼んで本尊とし、この神に帰依専念すれば必ず救済されると説く。バガヴァットを讃える歌を『Bhagavad-gītā』と名づけている。本書の成立はB. C. 2世紀ごろとみられているが、この思想は、大乘仏教の形成に重要な影響を与えたと見られている⁶⁵。

社会経済史的に見て、この時代の著しい特徴は交通の発達によって西方のギリシア・ローマ世界と盛んに貿易を行うことである。その港はたんに西インドの沿岸諸港のみでなく、南インドの東海岸の諸港にまで及んだ。それにしたがってインドではじめてクシャーナ王朝によって金貨の制度が実質的に確立され、この王朝のローマとの貿易によって蓄積された財力は相当大きかったらしい⁶⁶。

南インドも同様に、貿易の発達はシャータヴァーハナ王朝を繁栄せしめ、文化活動を盛んならしめ、宗教も非常な庇護を受けた。デッカン西部地方のKondāne, Junnār, Nasik, Karliなど有名な仏教石窟寺院はサカ族の藩侯の寄進によるものもあったが、ほとんどがシャータヴァーハナ王朝の庇護のもとに、紀元前後の時期に開窟された。それらの窟院の中には、有部系統の法蔵部、賢胃部ならびに大衆部といった所属部派名の明らかになって

⁶⁴ 塚本[1981]228.奈良[1979]239.

⁶⁵ 塚本[1981]230.

⁶⁶ 静谷[1956]266-269.奈良[1979]212-216.

いるものもあった。AjantāおよびEllorāの諸窟は時期的にはこのあとに続くものである⁶⁷。

国王藩侯を初めとして、一般に社会的地位や身分は世襲であったが、当時はインド内部の動揺も著しかったので、職業の世襲は完全には行われていなかった。バラモンに次いで社会的に重要であったのは、資産者gahapatiであったらしい⁶⁸。

しかし西インドのJunnar窟院では、カーストをあらわす銘文が発見された。年代もA. D. 180-230に推定される。それを見れば、次のようである⁶⁹。

集会室は、Mudhaka（クシャトリアのMūrdhakaカースト）に所属するMala（Malla）とGolika（牧夫のカースト）に所属するĀnada（Ānanda）との2人の寄進物である。

と刻まれているので、ある程度カーストが行われていただろう。

クシャーナおよびシャータヴァーハナ王朝は西紀3世紀に入ると次第に衰微して、インドにはいくつかの群小諸国が対立していたのであるが、マガダ出身のCandragupta 1世が紀元320年に即位してグプタ王朝を創始した。次代のSamudragupta王（325年ころ即位）は南北にわたる全インドを征服し、ここにマウリヤ王朝以後初めての統一国家が形成された。この王朝は494年頃までは相当に勢力を持っていたので、インド古典文化の華を咲かせるに至った。

この時代のインドには、さまざまな文化現象、政治経済的社会的現象と密接な交渉があつて、ローマとの東西貿易が盛んに繁榮し、異民族の文化や宗教が混在する。ヴィシュヌやシヴァの熱狂的な信仰が流行し、また異民族の間に仏教が盛んに受容された。クシャーナ王朝の社会制度の確立と安定、ならびにこれに伴う文化現象、特に大乘仏教の興起は、その時代のかかる社会経済的基盤から切離して理解することではできないと思われる。

⁶⁷ 高田[1969]93-105.宮治[1981]52-61.肥塚[1972]39-57.

⁶⁸ 中村[1956]101-103.宮本[1954]337.静谷[1956]269.

⁶⁹ 塚本[1996]410,Junnar 30.

IV まとめ

以上のように、いままで大乘仏教起源に関する研究は、三つに分けられる。それは、(1) 大衆部起源、(2) 仏塔・在家起源説、(3) グループとしての大乗などである。

しかし多方面での試みはあるにしても、その起源の正確な実態・年次・様相はまだ明らかになっていない。ただ思想的に、それまでの伝統的な部派仏教に対し、斬新なものを打ち出したのであり、時代や仏教の流れの中でその必然性により生まれてきたものではないかとも考えられる。

文献資料よりはるかに古くて、比較的に原初形態を保存している碑文を通じての研究によれば、すでにB.C.2世紀から比丘・比丘尼の仏塔との深い関わりを物語っている。これをどう解釈したらよいのであろうか。初期大乘仏教「教団」の存在は、問題となる点であろう。

(参考文献)

- 前田慧雲 [1903] 『大乘仏教史論』 文明堂
 塚本啓祥 [1981] 「大乘の教団」 『講座・大乘仏教1—乗仏教とは何か』 春秋社
 [1996] 『インド仏教碑銘研究』 平楽寺書店。
 [1981] 「大乘の教団」 『講座・大乘仏教1—乗仏教とは何か』 春秋社
 金倉圓照 [1981年] 『インド哲学史』 平楽寺書店。
 N. Dutt [1930] Aspects of mahāyāna Buddhism and its relation to hīnayāna, London
 E. Conze [1962] Buddhist Thought in Indian, London.
 金岡秀友 [1957] 『シテェルバトスコイ大乘仏教か異論』 理想社
 水野弘元 [1954] 大乘経典と部派仏教との関係 宮本正尊『大乘仏教の成立史的研究』 三省堂。
 佐々木閑 [1995] 大乘仏教在家起源説の問題点 『花園大学文学部研究紀要』 27。
 平川彰 [1990] 『初期大乘仏教の研究II』 春秋社
 [1981] 大乘仏教の特質 『講座・大乘仏教1—乗仏教とは何か』 春秋社
 [1974] 『インド仏教史 上』 春秋社
 高崎直道 [1985] 総説 大乘仏教の〈周辺〉 『講座大乘仏教10』 春秋社

- 杉本卓洲 [1984] 『インド仏教仏塔の研究』 平楽寺書店。
 高田修 [1969] 『仏像の起源』 岩波書店。
 [1969] 『仏教美術史論考』 中央公論美術出版。
 肥塚隆 [1985] 大乘仏教の美術 『講座大乘仏教10—大乘仏教とその周辺』 春秋社。
 下田正弘 [1997] 『涅槃経の研究』 春秋社。
 G. Shopen, two [1997] Problems in the History of Indian Buddhism”, Bons, Stons, and Buddhist Monks, Honolulu.
 宮治昭 [1981] 『インド仏教美術史』 吉川弘文館。
 G. Schopen [1979] “Mahāyāna in Indian Inscriptions”, Indo-Iranian Journal, vol. 21.
 長沢和俊訳注 [1978] 『法顕伝・宋雲行記』 平凡社(二版)。
 S. Dutt [1962] Buddhist Monks and Monasteraies of India, London.
 早島鏡正他 [1982] 『インド思想史』 東京大学出版会。
 奈良康明 [1979] 『仏教史I』 山川出版社。
 三枝充應 [1979] 『インド仏教思想史』 レグルス文庫46, 第三文明社。
 中村元 [1968] 『インド思想史』 第二版, 岩波書店。
 [1956] 「大乘仏教興起時代のインドの社会構成」 『印度学仏教学研究』 第4巻・第1号、。
 山口益・横超慧日・舟橋一哉 [1961] 『仏教学序説』 平楽寺書店
 武内紹晃 [1981] 「仏陀観の変遷」 『講座・大乘仏教1—乗仏教とは何か』 春秋社。
 宇井伯寿 [1932] 『印度哲学史』 岩波書店。
 宮本正尊 [1954] 『大乘仏教の成立史的研究』 三省堂。
 静谷正雄 [1956] クシャーナ支配下における仏教の社会的基盤 『インド学仏教学研究』 第4巻・第1号。
 肥塚隆 [1972] Satavāhana朝の仏教石窟 『日本仏教学会年報』 第38号。
 イル ムク
 (駒澤大学大学院博士課程)

<キーワード> .

大乘仏教, 起源, 大衆部, 成立年代